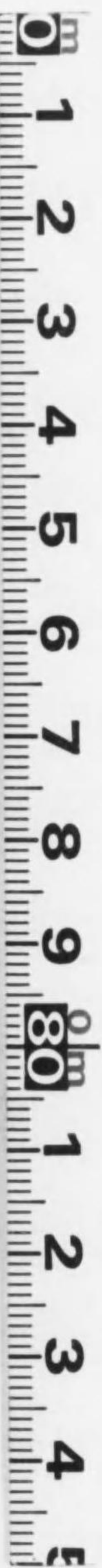


始



特 253
489

淨土の旅

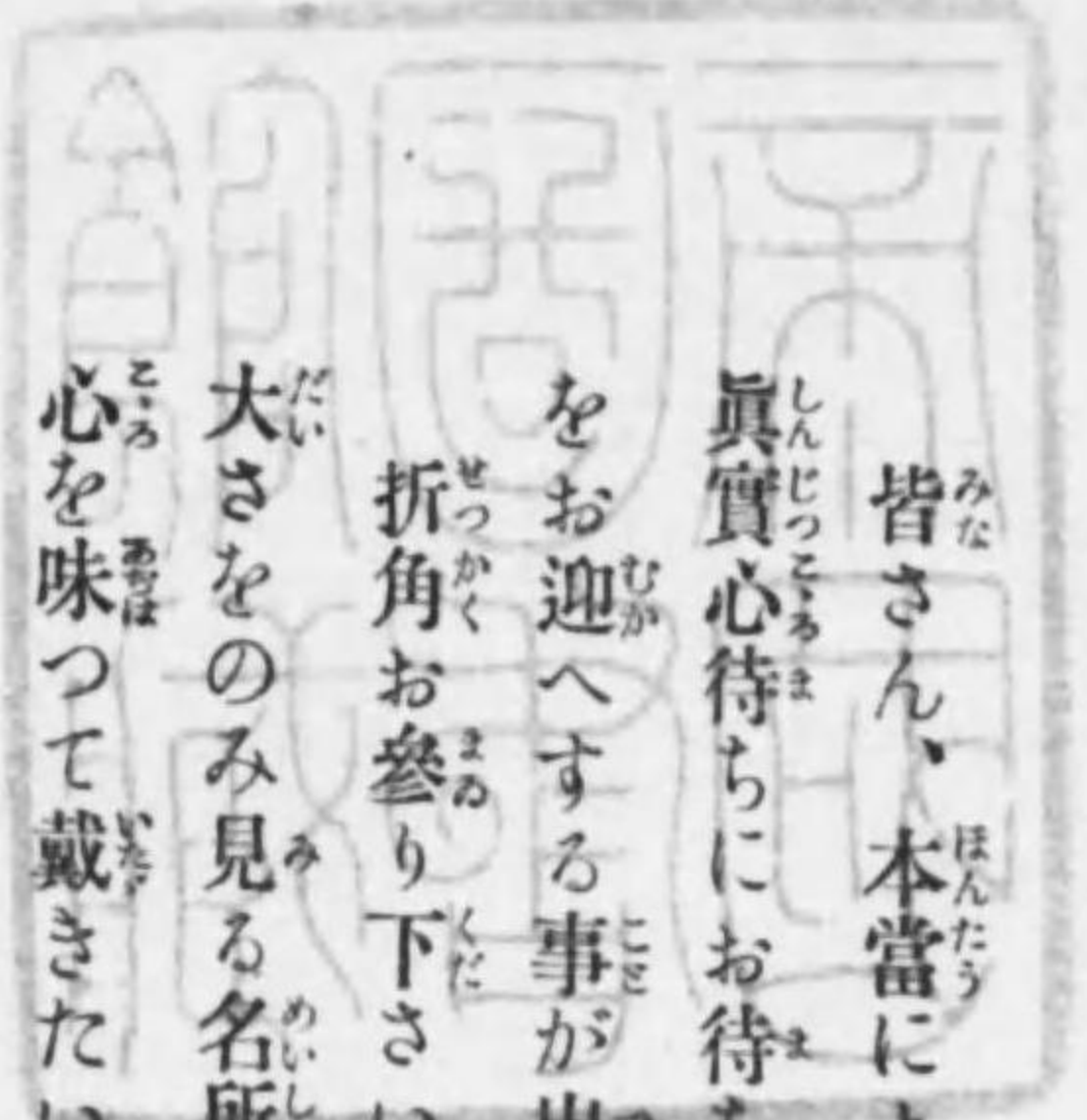
本派本願寺

本願寺
?4
7
號

特253
489

浄土の旅

内田 暁 融



皆さん、本當にようこそお参り下さいました。あなた方の御参拜下さるのを、眞實心待ちにお待ちしてゐました。有難き御縁にもよほされて今日御参りの皆様をお迎へする事が出来た事を、何よりも嬉しく思ひます。

折角お参り下さいましたからには、單に廣い境内の宏大さとか、古い殿堂の壯大さをのみ見る名所見物式な参り方でなくして、この法城に生き動いてゐる尊い心を味つて戴きたいのです。

唯今皆様がお参りになつた阿彌陀堂に、御影堂に、古來幾多の人等が、跪き合掌した事でありませう。幾百萬幾千萬の方々が、或は法悦の微笑を以て、或は懺悔の涙を以て、心からなる合掌を捧げた事でありませう。思へばこの御本山の



殿堂は、私等の祖先の血と力によつて護持せられて來た法城であり、魂の故郷であります。一片の瓦にも、一本の柱にも、日本佛教の傳統的精神が生々しくにじんであつます。

靜かに掌を合せて下さい。さうして、念佛の中に力強く生かされ、念佛の中に安らかに此世を去つた祖先のことを偲んで下さい。

祖師聖人は「彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛を申さんと思ひ立つ心のおこるときすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふ」と仰せられて、私等が念佛申させて頂くことは如來大悲のお催しであるから念佛に生きる人は常に佛とともに起き佛とともに臥し、佛と二人連れの生活であることを喜んで居られます。實に私等の人生は如來様と二人連れの巡禮の旅であります。

それについて思ひ合せて頂くのは、かの白衣を着て、菅笠をかむつて、手甲、脚絆の旅装をなし、草鞋をはきしめ、金剛杖を携へながら歩む巡禮者の姿であり

ます。春霞の奥にあの鈴の音を聞いた時、菜の花の野路を歩むお遍路さんの姿を見た時、何かしらしみりとした氣分を味はせられます。

あの人等の笠には

迷故三界城 悟故十方空

本來無東西 何處有南北

と書かれてあります。更にその行間には同行二人と書かれてゐるのを皆様は御存じでせう。たつた一人のお遍路さんの笠にも同行二人と書いてあります。自分は獨りで巡禮するのではない。いつもくお大師様と二人である。お大師様が一緒だから、どんな山奥を旅する時にも決して淋しくはない。——かう言ふ意味であります。同行二人、なんと言ふ趣深い言葉であります。

勿論私等は遍路行者達の頭上の笠に書かれてある通り、如何に三界は城であるのと知らされても、私達の胸の中には家庭を捨てる事が出来ない人間です。又十方空と悟らうとしても愛慾の廣海に沈み名利の大山に迷ふ人間であります。も

しそれが救ひの條件でありますならば、私等は永遠に救はれる事は出来ません。然し此處に嬉しい事には、かゝる者をこそ救はんの本願が建てられてゐるのであります。それにしても、「十方空」の悟りを求むる遍路さんの心事よりも「同行二人」の心ばえの旅姿はなんとつかしいことではありませんか。

煩惱を断たずして涅槃を得、家庭の中に有りながら、救はれて行く道、これこそ人生の白道であります。親鸞聖人は、愛慾を否定した聖者の宗教を擱いて、この凡夫直入、在家のまゝで救はれる宗教の存在を、身を以て證明し、實踐せられたお方であります。煩惱のまゝにうごめく罪業の凡夫をこそ救はんと言ふ如來の本願に、生かされて力強く九十年の生涯を歩まれたのが親鸞聖人です。それで聖人の生涯は如來と同行二人の人生の旅行であつたのでせう。而して又七百年來、幾千萬の人等は、聖人と共にこの同じ道を歩み、愛慾の家ぐるみ救はれて行つたのであります。

この意味からしますと、迷故三界城、悟故十方空と、家をすて、巡禮するあの

人等と心を同じうする事は出来ませんが、然し同行二人の心持は有難く味はれます。

それに私等もいつも同行二人であります。私が一人静かに念佛する時、聖人は、御同朋よ御同行よと呼びかけながらお念佛し給ふのです。淋しい時も、嬉しい時も、親鸞聖人はつきまとふて離れ給はぬのです。

鳥の將に死せんとするやその聲悲し、人の將に死せんとするやその言や良しと言はれてゐますが、聖人が、人生最後の日に於て、書き綴られた御臨末の御書、私等は感激の涙なしに戴く事は出来ません。(御臨末ノ御書全文)

「我が歳キハマリテ、安養淨土ニ還歸ストイフトモ、和歌ノ浦曲ノ片雄浪ノ、ヨセカケク歸ランニ同シ。一人居テ喜バ、二人ト思フベシ。二人居テ喜バ、三人ト思フベシ。ソノ一人ハ親鸞ナリ。我レナクモ法ハ盡マシ和歌ノ浦 アラクサ人ノアランカギリハ。

一字一涙の聖文とはまさしく之でせう。聖人の全生命が、あふれてゐます。眞實に生き眞實をひろめ、眞實に死んで行つた親鸞聖人は、眞實を生死の地盤とせられた故にこそ、永遠であります。眞實とは念佛であります。念佛に生かされ給

ふた聖人は、念佛の中に永遠の生命に輝いてゐます。

一人居て喜ば、二人と思へ

二人居て喜ば、三人と思へ

その一人は親鸞なるぞ

何と言ふ有難いお言葉でせう。

私が唯今稱へる一聲の念佛、それは簡単な短いものでありますけれども、その中には法藏菩薩の不滅の願心が輝いてゐます。凡ゆる衆生を救はずには措かないと言ふ大悲の御心が躍動してゐます。雪山を越え、砂漠を越え、激浪を越えて流轉して來た求道、弘法の三千年の歴史が含まれてゐるのです。念佛に生かされた人等の生命がみなぎつてゐるのです。

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

親鸞聖人は念佛の中に不滅親鸞として輝き給ふ。念佛する時、いつも私等は

同行二人である。

悲しい時、共に大悲の涙を流し給ふ一人の人間がある。嬉しい時、共に微笑ませ給ふ一人の人間がある。その一人こそ親鸞聖人である。之程力強くも有難い事はありません。

獨生獨死、獨去獨來の人生に、同行二人と聞かされて見れば、私等は胸底より生の感激の迸るを禁じ得ないのであります。

「同行二人」の世界を味はせて貰ふ時、私の胸には、獨乙の詩人ウーランドの詩が、浮んで來ます。

彼は今から八十年程前に死んだ、獨乙の有名な政治家であり、更にそれ以上に有名な詩人でありました。彼には心から許し合つた二人の親友がありました。一人は大先輩の叔父さんで、後に牧師になつた人であつた。他の一人は、彼と一緒に机を並べて法律を學び、政治を論じた同僚の友、後一年志願兵となつて、ナポレオン戦争で、戦死した人であります。彼はいつもこの二人の親友と喜憂を共に

してゐました。然し愛別離苦の運命は、二人の親友を地上から奪ひ去つて仕舞ひました。彼が昔、遊んだネツカル河を渡る時、懐友の情、送つて次の詩が生れました。

顧みれば數年前嘗て一度この川を渡つたことがある。

河畔には當年の古城が依然として夕陽に聳えてゐる。

河上にはヤナが昔と變らず涼々として響いて居る。

その時には我の外に二人の友が此の舟に坐し共に此河を越えた。

一人は老人で靜かに世を渡り後なほ靜かに世を去つた。

一人は血氣熾んな青年で、嵐の中に身を處して、遂に嵐の爲に倒れた。

有りし當時を追憶すれば、何時も二人の面影が現はれる。

而も此二人は死の手の爲に我より裂かれるものなるに……

否、否、我が二人と交りて、友よ友よと親しんだ睦じさは、肉の交りにあらざりし。

心と心との友誼であつた。魂と魂との交りであつた。

靈的親交なりし上は、ヨシ今肉體はあらなくも尙親しみは變るまい。

オイ船頭、モ一舟が着いたのー。

コレ、三人分の賃金を拂ふから納めて呉れ。

お前の目には見えなかつたであらうが、客は我の外に尙二人あつた。

友を慕ふ切々たる哀情が、讀む者の胸をつかすには居ない。單に友をしのぶ丈けではなくして、それを行爲に現はして、船頭に三人分の船賃を拂つた所に、絶大の感銘を受けずには居られない。

今は亡き友を慕ふて涙する人は澤山あるでせう。然し實際の上には現はしたウーランドに見習ふ人は少いでせう。

凡ゆる理論は灰色である。實踐のみが緑であると言つた哲學者があります。如何に立派な教でもそれが人生々活の中に實踐せられない限り零であります。

同行二人！私等は口先だけで同行二人と喜んでゐる丈では何にもなりません
 私等が「同行二人」を如何に人生に生かし、如何に實踐するか問題であります。
 皆さん。もう一度合掌して下さい。そして静かに念佛の傳統を味つて下さい。
 静かに神聖な殿堂に於て合掌する時、念佛に生かされた祖先の方々の面影が、髣髴として浮んで来ないでありますか。その一人は親鸞なりと呼びかけ給ふ大悲の御聲が、惻々として迫つて来ないでありますか。
 絶對他力の救ひに生かされて行く身の幸福、日本人の血の中に流れそれを清めてきた念佛を戴いた幸福、何ものかこの幸にまさる幸がありません。
 この幸福を思ふ時、どうして奮ひ立たずに居られませう。力の限り命の限り、世のため人のためにつくさずには居られないのです。

昭和十一年七月十四日印刷
 昭和十一年七月十六日發行

發行者 京都市堀川通本願寺 宇野 本 空
 京都市西洞院七條南
 内外出版印刷株式會社
 代表者 須磨勘兵衛

發行所 京都市堀川通本願寺
 教務局 布教部

終

